

四條畷楠正行の会便り

創刊号 令和2年5月12日

編集・発行 扇谷昭

■ 非常事態宣言、5月末まで延長 ■

新型コロナウイルス感染対策として、2月20日に教育文化センターが休館状態に入り、3月、4月、5月と3回連続例会が休会となりました。

今まで、ごく自然に送っていた日常生活が遠い過去のものとなってしまう、「3密」を避け、不要不急の外出を自粛しながら、家に閉じこもる日々が続いています。政府による緊急事態宣言も5月31日までの継続となりましたので、少なくともここ数か月は耐え忍ぶ生活が強いられることでしょうか。どうか、明日に夢と希望をもって、この苦難を乗り越えましょう。

会員の皆様との情報共有を目的にこの便りを発行しましたので、お届けいたします。

■ 和田正遠は、正成の甥？ ■

真木副代表から「(正成の父、楠正遠？との関連で)同封の写真・和田正遠は拡大写真では『大楠公の甥』のように読み取れるのですが…」と、お便りをいただきました。

この写真は、河内長野市三日月町の延命寺にある和田正遠の墓と伝わるものです。

この和田正遠という人物は、太平記にも登場する人物です。

太平記巻第三ノ4、赤坂城の合戦の

事の際は、「正成は…砦の中に屈強な射手を二百余人集めておき、実弟の七郎と和田正遠に三百余騎をつけて別の山で待機させた。」と、また巻第十六ノ14、楠木正成兄弟討ち死にの事の際は、「兄弟ともに刺し違え、同じ場所に倒れ伏した。橋本八郎・正員、宇佐美河内守・正安、神宮寺太郎兵衛・正師、和田五郎・正隆をはじめとし、主な一族十六人、それに従う武士五十余人も思い思いに並び座って、一度に腹を切った。」とあります。和田正遠は、和田正隆、通称五郎とも云われます。



ですから、この和田正遠(楠正遠、和田五郎正隆)は、楠正成の配下に登場することは確かですが、正成の甥であったか否かはわからず、尊卑分脈楠氏系図で正成の父とされる正遠とは別の人物と思われます。

■ 楠氏末裔、楠正暢さんからお便り ■

4月9日、神戸市在住の楠正暢さんからお便りをいただきました。詳細は、楠正行通信第109号に掲載の通りです。

楠正暢さんとは、その後、お電話やメールで何度かやり取りをしましたが、その中で「楠」か「楠木」かお悩みのことでしたので、私から送ったメール本文を以下掲載します。

□扇谷が送ったメール本文(写し)

「楠」か「楠木」かについてですが、四條畷市では、公式見解として、父、正成は「楠木」の2字表記、子、正行は「楠」の1字表記を採用しています。

明治以降、「楠木」が教科書に採用され一般化してきた中で、四條畷市雁屋の正行墓・小楠公墓所の巨石碑、大久保利通による揮毫「贈従三位楠正行朝臣之墓」が「楠」の1字となっていることから、楠正行を採用し、小学校3年生が使う副読本や四條畷市・教育委員会発行の市勢要覧・市史や記録集等、すべて「楠」の1字を使っています。

ですから、私たちの四條畷では、楠の1字表記が常識となっています。

この「楠」か「楠木」かについて、一昨年、発行されました岩波新書「後醍醐天皇」兵藤裕己著に詳しく掲載されました。

該当ページのみ添付送信します。

本来は「楠」だったものが、明治期の国史の見直し過程の中で「楠木」が採用され、その後の教育の中でこの二文字が使われたことから、あたかも「楠木」の2字表記が正しいとの風潮が広がったとのことでした。

因みに、朱舜水が残しました正成像賛も、正行像賛も、「楠」の1字表記となっています。

江戸期、加賀藩主・前田綱紀の依頼を受けて狩野探幽の描いた「父子決別図」に賛文を寄せた朱舜水は、10年の歳月をかけて正成に3首、正行に1首の像賛を書き上げました。楠氏に全く知識のなかった明の儒臣・朱舜水ですから、門弟の安東省庵を通じ、当時入手可能な様々な版本等によって楠精神を学んだものと思われますので、当時、楠の1字表記が正統であったことの証左であると思います。

この意味で、楠木同族会の会員の方々が、すべて「楠」の1字表記は妥当なものと史料します。

逆に、「楠木同族会」が昭和12年5月25日に発足した歴史的背景を鑑みますと、当時は、「楠木」を使うことが主流であったため、この2字表記を使ったのではないのでしょうか。

願わくば、同族会の冠も、「楠木」から「楠」に変更していただければ世の中の理解は大いに進むものと存じます。

■ 「なわてと正行」特別展を提案 ■

なお、兵庫県立歴史博物館の特別展「ひょうごと秀吉」は、兵庫県制150周年を記念する先行事業として開催されたものでした。今年7月、四條畷市は市制施行50周年を迎えますが、このような特別展企画はないことから、四條畷市に「市制施行50周年記念事業—特別展“四條畷と正行”」の開催を提案しました。

内容としては、正行像賛の書・略解・扇子、楠公碑の掛け軸・略解、絵本6分冊、正行かるたのパネル、正行ポスター30枚、正行直筆国宣や書状・その解説、絵と文で構成する小楠公一代記、等の展示です。

しかし、市からの回答は、市や教育委員会で開催することは難しいので、貴会が主催・開催されるようであれば協力する、というものでした。

■ 西村さんからお便りと論文 ■

西村さんから楠氏の出身地をめぐる論文コピーが送られてきました。詳細は、楠正行通信第110号に掲載の通りです。

千早赤阪村のすぐ北に当たる太子町大字山田に残る小字楠木が発見されたという、楠氏の出自に関する極めて重要な内容です。私も同通信の最後に、「ここで結論を申し上げることはできないが、少なくとも、定説として紹介してきた得宗被官説・武蔵国御家人説・駿河出身説を良しとすることは困難になったようである。」と書きました。

楠氏の出自については、湊川神社発行「あゝ楠公さん」第12号（令和2年1月）掲載論文、「楠木正成の足跡」生駒孝臣氏著の中の『楠木氏の出自』に以下の通り記載されていますので紹介します。

□「楠木氏の出自」一部抜粋

楠木氏といえば、正成が河内国の赤坂（大阪府千早赤阪村）を拠点としていたことから、同地から発展してきたと誰もが疑わないであろう。しかし、楠木氏の名の地となる「楠木」あるいは「楠」といった地名が、河内国やその周辺にないことから、楠木氏が河内

以外の出身ではないかという疑問が出されていた。

そこで河内以外で、楠木氏の名の地の可能性が高い場所として、近年最も注目されるようになったのが、鎌倉時代の駿河国入江荘内にあった楠木村（静岡市清水区）という地である。ここは、同荘内にあった長崎郷とともに、鎌倉幕府の実権を掌握していた北条得宗家（執権を勤めた北条氏の嫡流家）の家臣（得宗被官）の所領と推測されることから、当地を名前の地としていた御家人の楠木氏が早い段階で得宗被官となり、正成よりも数代前に河内国に移住したという説が提起されたのである。

正成が鎌倉幕府の関係者であったということは、実は同時代の間も認識していた。正慶二・元弘三（1333）閏二月頃、京都では、正月から河内の千早城に籠城する正成を包囲しながら、なかなか城を落とせない幕府軍を揶揄する、次のような歌が詠まれた（『後光明照院閑白記』）。

楠の木の根はかまくらになるものを

枝をきりこ何のほるらん

言葉を補いながら現代語に訳すと、「楠木の根っこは鎌倉に成っているのに、なぜわざわざ（鎌倉幕府軍は）その枝を切りに（畿内へ）のぼってくるのだろう」となる。

これは、楠木の根（＝もと、おこり）は鎌倉にあること、つまり、正成が鎌倉幕府の御家人、あるいは得宗被官であるという事実を指しており、それは当時の人たちにとって共通の理解だったのである。

また、後世の史料には、元享二年（1322）に正成が、北条得宗家最後の当主北条高時の命令を受けて、紀伊や摂津の反乱者を討伐したという話がある（「高野春秋編年輯録」鎌倉將軍府）。従来、これらの史料はあまり重視されることはなかったが、楠木の名の地をめぐる検討や、京都で詠まれた正成に関する歌などとあわせていま一度見直されるべきものといえよう。

太子町大字山田小字楠木の発見は、楠氏の出自に大きな問題提起となることは疑う余地のないところです。“河内にない”とされてきた「楠木」の地名があったのですから。それも楠木石切り場跡ということですから。

■ 正成に再び光が当たっています ■

4月15日、NHKの歴史秘話ヒストリアは、楠正成を取り上げました。建水分神社の岡山禰宜、観心寺の永島長老らが登場し、大いに親近感をもって見ましたが、何よりも、最後のフィナーレで語られたナレーションが印象に残りました。

「楠正成に再び光が当たっています」